Thane Gustafson,

Capitalism Russian-Style.

Cambridge：Cambridge University Press, 1999, xvi＋264pp.

イワン・ツェリッシェフ

I

ロシアの市場経済化や脱共産主義がスタートしてから10年たった現在，ロシア社会の急激で必ずしも方向性が把握できない短期的な変動の分析よりも，長期的な進化トレンドの研究が求められている。長期的な流れの論理を正確に把握できれば，短期的な動きもわかりやすくなり，ロシア自体の選択肢や先進諸国などの対露政策の選択肢も明確化してくる。本書がこうした長期トレンドを把握するという大変難しい課題に挑戦している点は，評価されるべきであろう。

そのために著者グスタフソンは，資本主義に移行しているロシアを歴史学者，社会学者，経済学者，そして場合によってはジャーナリストの目で見なければならなかった。その意味で，本書はまさに学際的な研究となっている。ロシアの経済や社会のトレンドを総合的に，そして学際的に取り上げていることが，本書のポイントと思われる。

著者は「ロシアの市場経済化が失敗した」，「やはりロシアの新体制が確立してきた」，「ロシアには大金融資本家（oligarch）が支配しているクロニーキャピタリズムが生まれた」，「ロシア人は市場経済化が何なのか分からない」というような一方的で単純な指摘をしないばかりか，こうした見解にこだわること自体がいかに不適切かを見せている。

読者の注目を引きつけるような方法としては，ロシアはこうなっている，という覚えやすいキャッチフレーズを使うことが良いかもしれないが，こうしたキャッチフレーズでロシアの実態を理解するのは無理であるというのが，著者の重要なメッセージとして受け止められる。

大まかにいえば，グスタフソンのアプローチは以下のようにまとめられる。第1に歴史的プロセスとしてのロシアの市場移行の論理と特殊性を把握すること，第2に，市場移行プロセスの様々な側面，多くの場合，互いに矛盾する側面を分析し，そのプロセスを総体として理解すること，第3に，互いに矛盾する側面や方向性の違う動きが多くあっても，研究者として明確な結論を出すか，今後の考えられるシナリオを明記することの3点である。言い換えれば，研究の対象がいかに複雑であっても「これからどうなるのか分からない」というような書き方をしないことが，著者の姿勢である。

II

本書の構成は以下の通りである

第1章　新しいロシア革命――フライングか行き止まりか――
第2章　所有者の創造――インサイダー民営化とその帰結――
第3章　ウォール街がモスクワに来る
第4章　民間銀行の上昇と滅亡
第5章　資本家のいない資本主義はない――新ロシアにおけるアントレプレナーシップ――
第6章　ロシアの犯罪流行病
第7章　法の支配へ？
第8章　対応を越えて――ロシア社会の回復へ――
第9章　縮むロシア国家と税収のための戦い
第10章　むすび――21世紀の間際にあるロシア：市場への中途で――

第1章と最後の第10章は，著者のロシア社会の変革のコンセプトの大枠を示している。第1章を本書の入り口，第10章を出口とみることができる。その間の第2章から第9章までは，それぞれ市場移行の根本的な問題を取り上げる。具体的には(1)国営企業の民営化，(2)証券市場の形成，(3)商業銀行の誕生と破綻，(4)ロシアの新時代のアントレプレナー，(5)犯

罪の増加，(6)徴税難と国家衰退などの問題が論じられている。

入り口のところで，ロシアの市場改革が“false start”か“dead end”かという問題提起がなされる。前者であれば，戦略を是正し，市場経済化を成功裏に完了させることができる。少なくとも，統制経済が姿を消し，市場体制（「市場機関」）が整備されて，若い世代が市場経済に不可欠なスキルズ（能力）を育成しつつあるという前進がみられ，その上に，充実した市場経済を作り上げることができるはずである。

後者のデッドエンド（袋小路）であれば，ロシアの本格的な市場経済化自体が不可能である。市場改革がいくら唱えられていても，旧ソ連型の体質は消えない。つまり，旧ソ連の支配階層（共産党幹部，役所の官僚などのノメンクラツラ）が新しいオーナーとなり，企業の民営化を名目に，旧ソ連の国家資産を勝手に自分のものにしてしまい，様々なレントを獲得しているにすぎない。一言でいえば，市場経済化により，ノメンクラツラによるテイクオーバーが起こったといえる。

しかし，著者は前者の議論も後者の議論も正しくないと主張している。市場移行もノメンクラツラによるテイクオーバーと同じ物語の一部だからである。第１章のタイトルに提起された問題の解答は，第10章のタイトルにある。つまり，ロシアは市場への道の途中にある。スタートラインに逆戻りするはずはない。だが，道の途中にあるからといって，必ずしも残りの半分を通り抜け，活力のある市場経済を作れるとも限らない。むしろ，道の途中にあるロシアは，政治的にも経済的にも不安定であり，今後の変革が多くの矛盾を抱え，混乱とバイオレンス（暴力）も避けられないかもしれないと著者は主張する。

著者は，ロシアの市場移行を革命として定義している。ソ連型のマルクス・レーニン主義の政治的・経済的・イデオロギー的体制がうち倒され，憲法上でも思想上でもそれと違う新しい基盤の上に立つ仕組みができているからである。さらに，ロシアのその新しい革命の特徴について，いくつか重要な指摘がなされる。

第１点目は，その革命はまだ終わっていないということである。基本的に，革命は新しい秩序ができあがるまで数十年はかかるものである。現在のロシアの安定性は偽物にすぎない。第２点目は，革命の終点は新しいものと古いものの融合にならざるを得ないという点である。第３点目は，革命の政治的結果は，権力と富の新しい分配と新しい経済社会的秩序の上に成り立っている強い国家の確立という点である。よって，国家が弱い限り，革命は完了されていない。

本書が出版されたのは，1999年初頭，プーチン政権が発足する前であり，プーチンという政治家が首相になり，注目され始める前のことである。1999年初頭にまもなくプーチン時代が始まることをどんなロシア研究者も予言できなかった。だが，プーチン政権が強い国家作りを最大の政治課題・理念として打ち出していることが，グスタフソンのロシア新革命の分析枠組みが適切であったことを示している。その枠組みに従うと，仮にプーチン政権が強い国家づくりに成功すれば，ロシアの新革命が終わったという結論が出される。その時点で，ロシアの市場経済化が一体どんな体制を生んだかを判断できる。

しかし，いうまでもなくポイントは，上述の強い国家がなにをすべきかということにある。それに関して著者はすばらしい指摘をする。市場への途上にあるロシアにおいて，国家が既にオーナーではない一方，プレイヤーに市場のルールを厳守させる審判にもまだなっていない。経済主体に対する権力は，多分に否定的なものに留まっている。それはすなわち，制限を加える権力，問題解決を延期させる権力，許認可を断る権力，あるいは許認可の見返りに報酬を求める権力である。一方，肯定的な観点からの国家の機能の見直し作業は，絵に描いた餅のような，数多くの実施されないプログラムの作成に留まっている。

言い換えると，現在のロシアにおいて国家は市場のルールを設定し，これらを厳守させる能力，民間部門の経済活動を補完・支援しながら経済成長を促進する能力を発揮していないというのが，著者の主張である。まさにその通りだと思われる。

それと同時に，著者がその主張を明確にしていないと思われるところもある。強い国家なしで充実した市場経済が考えられないという重要な指摘がなされている一方，市場移行中の経済，特にロシア型経済体制の中の国家の位置づけについて，それがどうあるべきか，それともどうなりうるかという問題については，あまり明確でない。

さらに，産業政策の妥当性が事実上否定されている。産業政策論が，ロシアの市場経済化に相反するという見解やロシアにはアジア諸国のような産業政策が期待できないという著者の主張には，疑問が残る。キャッチアップ経済といわれるロシア経済においては，むしろ，国家は審判役に留まらず，リード産業や潜在的な競争力を持つ産業（宇宙航空，エコ製品，薬品，研究開発型ベンチャービジネスなど）を一定の期間内に政策的に促進する役割も果たすべきであるということも考えられよう。ことに国営の貯蓄銀行の預金などを財源に，日本の財政投資と同様の公的融資体制を作ることに意味があると思われる。これは，市場経済化の阻害要因ではなく，加速要因となりうるものである。

一方，市場経済化に伴う国家の弱体化プロセスに関する著者の分析は，核心をついたものといえる。特に，税金を払う「慣習」がないために企業による脱税，および資本流出が深刻化し，税制自体が非効率的であることに加えて，国の徴収力が弱い中，著者の言い方を借りると「税金のための戦い」がいかに大変なものになっているかが，本書を読むとよく分かる。グスタフソンが指摘するように，税徴収の問題は税制や財政赤字の問題に限らず，国と社会の間に信頼があるかないかという問題につながっている。税制基本法（tax code）が成立し，制度を整備してからロシア人にきちんと納税することを説得するというもっと難しい課題に取り組む必要があるだろうと，著者は指摘する。その説得は，国家と市民との間に信頼関係があるかどうかに左右される。

その点にかんして，プーチン新大統領の高い支持率が，こうした関係づくりの出発点になるかどうかということは興味深い。いずれにしても，つい最近税徴収率が上がっており，国債費を除いたロシアの財政収支が黒字に転じていることは，注目される。

「70年間の共産主義時代を経たロシアには，市場経済が分かる人がいない」，「企業家精神のある人（アントレプレナー）もあまり存在しない」，「ロシアの企業家というものは，ノメンクラツラの出身がほとんどであり，民間企業を新設，経営する際にも政治家や官僚とのコネに頼っている」，「国営企業の民営化も旧ソ連の企業幹部を中心としたインサイダーコントロール体制を生み出したにすぎない」などといったロシアの市場経済に関する批判は枚挙にいとまがない。これに対してグスタフソンは，まずロシアの社会・経済的環境では民営化がインサイダーコントロールにつながり，コネのあるノメンクラツラの出身者が企業の支配権を握ることが不可避であったと反論する。マフィアの台頭もやむをえなかった。しかし，企業の実績は，インサイダーコントロールがあるかどうかということや，経営者がノメンクラツラ出身であるかどうかということとは必ずしも関係ない。ビジネスチャンスが生じており，競争が激しく，資金へのアクセスがあり，うまいソリューションが見あたる時に，ノメンクラツラ出身の経営者でも画期的な企業改革とイノベーションができるというのが，著者の主張である。

その具体例として，ロシアの有名なチョコレートメーカー，石油大手会社，ガスの独占会社，大手自動車メーカーなどが取り上げられ，各社の成功の原因が詳しく分析されている。石油大手のルクオイル社のV・アレクペーロフ，自動車メーカー・ガズ社のN・プーギン，ガス独占のガスプロム社，R・ビャヒレフといったトップ経営者が世界的にみても第一流のアントレプレナーとして取り上げられている。一言でいえば，ロシアにも成功しているアントレプレナーがいるということが，本書を読むと納得できる。

一方，数多くのロシア企業の経営が非効率的であり，ノメンクラツラ出身の経営者の大半が経営を効率的に行っておらず，企業を犠牲に自分の儲けだけを考えているという企業幹部の様々な「不正行為」がロシアの経済・社会に大きなダメージを与えていることも指摘しておきたい。公正な競争を確保する環境づくりとともに，新時代の経営者の育成ができ

るかどうかが，ロシアの市場経済化の行方を決める。

ロシアのアントレプレナー階層は，民営化された企業の経営者よりも，1980年代後半（ペレストロイカの開始以来）に新規の企業をつくった者が重要な地位を占めている。新規の民間企業の誕生と発展プロセスの分析は，本書の目玉のひとつである。

ロシアのフランチャイズ・ビジネスの先駆者となったV・ドヴガニ，民間銀行を創設した化学系大学の学生，および共産青年同盟の活動家M・ホドルコフスキーとV・ビノグラードフ，人気のTVチャンネルNTVを創設した元研究所員のI・マラシェンコなどの物語などが非常におもしろい。

1985年から95年にかけて，ロシアはアントレプレナーシップの急激な拡大を経験した。正確にいえば，それらのアントレプレナーシップは，旧ソ連の体制崩壊を利用し，力関係による国家資産の再分配と取得を出発点としていた。こうして作られた新しい民間企業と政界との密接な癒着関係確立は，ある意味で「当然」の動きであった。こうした中で地下の経済を別としてこのような癒着関係のない新規の企業を設立することが非常に難しくなっていた。このようにしてロシアのアントレプレナーシップは壁にぶつかった。ロシアのアントレプレナーシップの物語は，ここで終わると考える人もいるかもしれない。しかし，グスタフソンはそうではないと主張する。彼は，ロシア社会研究の自分の大枠に沿って，現状のもうひとつのサイド，明るいサイドも探っている。

ロシア人はだいぶ前からアントレプレナーとしての能力を発揮している。その能力が消えたはずはない。ロシアの市場経済化が続くとしたら，そのニーズに対応できる経営者の新しい世代も登場する。アントレプレナーシップというのは，特定のビヘイビア（行動）のパターンというよりも，人間が出すエネルギーの一種としてみるべきである。ロシア人にはそのエネルギーがたくさんある。これが著者がみたロシアのアントレプレナーシップの明るい側面である。

III

長期的な視点からロシア社会・経済の流れの論理を把握すること，互いに矛盾し，方向の違う動きを含め，進化プロセスの様々な側面を取り上げ，ロシア社会の変革を総合的に取り上げること。しかも，研究の対象が複雑で多面的だからこそ，曖昧な指摘を避け，明確な定義と結論を出すこと。これがグスタフソンの書き方である。

銀行，証券市場，犯罪，法治国家づくり，どんなテーマを取り上げても，このアプローチは徹底されている。そのため，本書のロシア観は批判的とも親ロシア的ともいえず，楽観論か悲観論かというラベルもつけられない。本書は長い間様々な観点からロシアを研究していた大専門家が描いたロシア社会の幅広いパノラマだといえよう。

ロシアや欧米の文献を広範にうまく利用しているのに加え，著者自身の様々なロシアの経験が描かれている点は，読者にとって魅力的である。グスタフソンの読みやすい英語も長所として指摘すべきであろう。時々英語の文書の中にローマ字で書いたロシア語も含まれている。これはロシアの雰囲気を伝えている。

それでは，このようなすばらしい本を書いたグスタフソンは，ロシアの将来をどうみているだろうか。

経済的な奇跡はおこらない。ロシアは，これからの数十年間に成長率が著しく上がり豊かな国になることもない。だが，存続し進化を続けるにあたっては，成長力も豊かさも十分だろう。ロシア国民は資本主義への移行を心から歓迎してはいない一方，資本主義がロシア人の大半が属する都会の住民および中産階層のニーズに最も適している体制として認められるだろう。そして，市場経済こそがロシア人にその能力とエネルギーを発揮するための必要なセッティング（環境）を確保する。それだけでも資本主義への移行の最終的なメリットは十分に大きい。これが著者の最終的な結論である。

ロシアの今後の動きはいくつかのシナリオを想定することができる。思い切った構造改革が実施され，高度成長が始まる可能性もゼロではないと思われる。だが，グスタフソンが描いているシナリオが実現する可能性が一番高いといえよう。

（新潟経営大学経営情報学部教授）